「教育実習体験レポート」

[公立中学校　数学]

＜実習の概要（学校の特徴、実習内容）＞

僕は自身の出身中学校で、5 月 29 日から 6 月 16 日までの 3 週間（15日間）にわたり教育実習をさせていただいた。自然あふれる奈良盆地に位置する公立の中学校であり、1 年生が 2 クラス、2 年生が 3 クラス、3 年生が 3 クラスとなっており近隣の中学校と比べると少し小規模な中学校である。

今回の実習では 2 年〇組に配当され、2 年生の全クラスの数学の授業を計 17 回担当した。

＜実習の目標と力を入れたこと＞

今回の実習では「生徒にわかりやすいと言われるような授業構成を計画して実践すること」と「教員という仕事が自分に向いているかを明らかにするために、授業だけではなくその他の教員の仕事内容などを知り体験すること」を目標にしていた。教員になりたいという思いはありつつも実習前には教員という仕事が自分に向いているのかが分からず少し不安に感じていたため、この実習期間中は授業をすることだけでなく他の事務的な作業や生徒対応、教員研修、部活動などの様々な業務に積極的に参加することで教員の実態を知るために尽力した。

＜授業づくりでの工夫した点とこだわり、苦労した点＞

生徒にとって理解しやすく楽しい授業にするために主に工夫した点は、授業冒頭でのプリント配布の際に生徒の興味を引くような雑談をし、そこから導入に繋げることである。最初の1週目に様々な授業を見学した際に、無言でプリント配布を行う授業ではその時点で生徒の様子がかなり暗く、寝てしまう生徒が多少見受けられた。そこで授業冒頭のクラスの雰囲気が授業の進行に大きく影響すると感じ、そのような生徒と会話してそれらをクラス全体と共有することで明るい雰囲気のまま導入に繋げることを意識した。今回の担当した分野は「連立方程式」であり、苦手意識を持つ生徒が出てくることが予想される。そこで連立方程式の解き方を解説する前に導入として、日常生活での買い物を例として取り上げて連立方程式を一緒に作ることで生徒が関心を持てるように授業計画をこだわった。特に授業プリントは必要な情報を最低限にとどめて図なども入れて見やすいように作成し、一度授業が終わるごとに細かな修正を繰り返して満足いくまで教材研究を行った。

数学の授業づくりで最も苦労したことは、学力差の問題である。同学年の２つのクラスの間では中間テストの平均点は10点ほどの差があり、数学に対する苦手意識の差も大きいため同じ授業計画であっても進度が大きくずれてしまうという恐れがあった。そのためクラス毎に授業で取り上げる問題数を変更するなどの臨機応変な対応が重要になってくるように感じた。それらに加えて1つのクラスの中でも生徒間の点数差が非常に大きく、数学が得意な生徒と数学が苦手で全くできない生徒の二極化が激しいことが授業を何度か担当することで明らかになった。授業は基本的にはわからない生徒に向けて行うべきであるが、できる生徒にとっては退屈になって寝てしまう生徒も出てくる恐れがあった。そこで途中からは授業プリントとは別に練習プリントを準備して、例題の解説中に余裕のある生徒には各自で練習

プリントを進めてもらうように指示することで、全生徒が手を動かすような状況になるように工夫した。

＜実習をしての気づき、指導・指摘されたこと＞

実習を通して気付いたことは「部活動の重要性」である。実習前は部活動に参加する予定は全くなく、OB としてバスケ部に１度だけ顔を出すつもりであった。しかしその１度の見学の際に、２年〇組の教室内では内気で静かであまり声を出していない生徒がとても大きな声で楽しそうにバスケをしているところを目にした。このような普段教室内では見られないような生徒の姿を部活動に参加することでもっと見たいと感じたため、それ以降の全ての部活動（土日を除く）に参加した。コートの外から指導するだけではなく、一緒のコートに入って練習に参加してコミュニケーションを取ることで、内気だった生徒が次第に話しかけてくれるようになり、僕の授業にも少しずつ積極的に参加してくれるようになった。部活動でしか見ることのできない生徒の顔があることに気づき、生徒達のことを理解する上でのスポーツの重要な役割を感じた3週間であった。近年部活動の外部委託が進んでおり僕自身も概ね賛成であったが、今回の実習を通して部活動は完全に外部に委託するのではなく、外部の人々と協力して役割を分担することが重要であるように感じた。来年以降教員になった際には、自分が経験したことのある部活動だけではなく様々な部活動の指導をしたいと感じ、そのためにも今のうちから体を動かして多くのスポーツや芸術に触れておきたいと思う。

実習中に「授業に対して消極的な生徒への声かけが少ない」という指導・指摘をいただいた。今回担当した分野が「連立方程式」であり数学が苦手な生徒にとってはかなり苦痛に感じる単元である。花屋での買い物という日常生活と絡めた例などを用いてなるべくわかりやすく伝えたつもりではあるが、数学が比較的できる生徒にはわかりやすいと言われたのと対照的に、数学が苦手な生徒からは素直にわからないと言われて、寝ている生徒も少し見られた。僕がわかりやすく伝えたつもりであっても生徒がわかりやすいと感じないと意味が無いだろう。生徒が本当にどこがわからなくて困っているのかを明らかにしなければならず、そのためにも授業中に教室を歩き回る余裕を持つ必要がある。その際に寝ている生徒に声かけを行うべきであるというアドバイスをいただいたが、どのような声かけを行えば良いかという明確な答えを自分自身で出すことができなかった。

実習の反省点としては「内気な生徒に対する働きかけが少なかったこと」である。教室や廊下で陽気な生徒やよく話す生徒に声をかけられることが多くそれらの生徒と話していることが多く、教室の隅などで静かにしている生徒達と話す機会をもっと作るべきであったように感じる。不登校気味の生徒に対してどのように声かけすれば良いかわからなかったが、どのような内容でも良いのでもう少し声をかける努力をするべきであった。

＜全般的な感想と今後の展望、その他＞

この３週間を振り返ると想定していたよりも何倍も楽しく充実した時間を過ごすことができ、教員としてこのまま学校に残りたいと感じるほどであった。実習の最後の授業は実習生の担当する学活であり、僕が準備したパワポを使って先生当てクイズを行った。準備にかなりの時間を要して睡眠時間もかなり少なくしんどかったが、最後の学活の際に生徒が真剣にクイズに取り組み楽しんでいる様子を見て、疲れが一瞬で飛んでいくほど嬉しかった。

今回の実習では目標の１つとして「教員という仕事が自分に向いているかを明らかにすること」を掲げていたが、３　週間の実習を終えてその答えを明確にすることは不可能であった。授業での指導力や生徒対応能力、生徒から慕われる能力は今の僕には十分にあるとは言えず、現役の先生に圧倒される毎日であった。しかし、そのような先生方に負けないように食らいついて学ぼうとする意識は３週間持ち続けることはできた。そのような面では、教員という仕事が自分に向いているということは現段階では断言できないが、「教員になりたい」という気持ちが強くなったことは明らかである。教員の大変さとそれを超えるやりがいを言葉で聞くだけではなく肌で感じることができたことは、教員になる上で非常に価値のある経験であり、そのような機会として教育実習をさせていただいたことに感謝したい。

直近の目標として一週間後に教員採用試験が控えているため、まずはそのための準備に全力を注ぎたい。そして教員になった際には今回の教育実習の経験を踏まえて、「自分の言動に責任と自信を持てるような先生」になりたい。実習の反省点でも挙げたように内気な生徒や数学が苦手な生徒に対する働きかけができるような広い視野と包容力を持ち合わせた教員となり、生徒の成長を最も身近な立場からサポートしつつ自分も成長し続けることができるように向上心を持ち続けられるように努力したい。